

- ② 肩ベルトが付き、体位により長さを調節出来るので、食事や遊び等、生活活動の姿勢が比較的良くなった。
- ③ 介助者の操作も容易である。

一般用安全ベルトの実用化に合わせ、病棟の大半の車椅子が新調された。患児の個人に合った車椅子は、安全ベルトの装着により、一層の安全性を高めた。又、軽くて美しいため患児の行動範囲を広めると共に、大きい安心感を与える結果となった。

16、移動式足踏台の作成及び工夫

国立療養所東埼玉病院

成 富 明 子	古 橋 祐 子
中 村 文 美	佐 藤 昌 子
沖 村 悦 子	滝 あ け み

〔はじめに〕

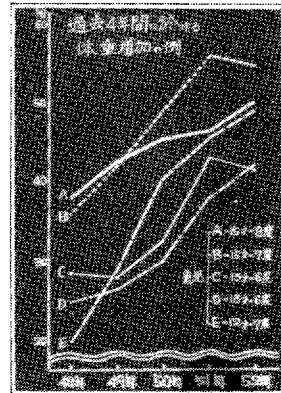
PMD児は、初期を除いてほとんど車椅子上の生活を余儀なくされているが私達はそれに伴い車椅子上の患児の援助を数多く行う。しかし、介助者の体型及び援助方法により、腰痛その他の障害が起こる可能性もあるため少しでもこれらを防ぐために、移動式足踏台を作成し検討してみたので報告する。

表1は、患児の体重増加の状況5例であるが、E患児をみると4年間で約28kgの増加がみられる。体幹に最も近い位置で患児を持ち上げる事は言うまでもないが、ある一定の高さ以上持ち上げる事は強度の労力を必要とするため介助者の腰椎に必要以上の負担がかかる。これらを考慮し種々の検討を行ない大きさの異なる二種の足踏台を作成した。低い方の高さが17cm、高い方が25cmである。

(1) 調査方法及び結果

介助者の身長に異なり 160 cm 以上を A、155～159 cm

表 1



までをB、150～154 cmまでをC、150 cm以下をDと区分し記録した。足踏台の高い方を(1)、低い方を(2)とした。高さについては、(1)の台は、A B C D全員が高すぎると答えた。巾については凸部をもっと出した方がよい。巾はもう少し狭くてもよいという答えが多かった。安全性について、底部は、ゴムですべらないようになっているが凸部が少ないために不安を感じるという答えが多かった。移動については材質は木製のため重いという意見が多かった。

介助者の労力及び使用状況について、患児の背部を介助する者は、前に多く身体を曲げて持ち上げるため背部に軽度の疼痛を訴え、下肢の介助者は、体重が前部にかかるため介助しにくいと答えた。一般に介助者は、身長区分A・BよりC・Dの方が良い結果を得ることが出来たが、まだ高さ及び巾、重さ、又安全性においても改良の必要があると思われた。

(2) 改良足踏台の作成

私達は、種々の検討を重ね改良足踏台の作成を行なった。写真1の低い方が改良足踏台である。高すぎるという答えが多かったのを参考に高さを10 cmと低くし、凸部を10 cm延ばし、巾の最も長い部分を16 cm短縮し64 cmとした。

写真1



(3) 作成後の調査方法及び結果

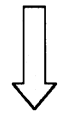
前回のように身長を区分した。高さ及び巾と安全性については、A B C D全員が良いと答えた。

移動については、全体的に台を縮小したため軽くなり持ち運びが大変容易になり使用しやすくなった。介助者の労力及び使用状況は、台を使用しない場合と使用した場合を比べてみると患児の持ち上がる高さが6～10 cmもの開きがありとても介助しやすいという答えが多かった。

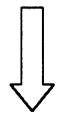
患児が介助を受けた上での感想は、身体が高く持ち上げられるので楽であると答えたのが多く余り変化がないと答えたのは、極少数であった。

(4) ま と め

私達は、この改良足踏台の作成により、手軽に持ち運べ、簡単に使用することが出来、体重の多い患児でも多くの労力を必要とすることなく持ち上げる事が出来、腰痛その他の障害も著しく軽減し、現在では欠く事の出来ない介助用品として使用している。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔はじめに〕

PMD 児は、初期を除いてほとんど車椅子上の生活を余儀なくされているが私達はそれに伴い車椅子上の患児の援助を数多く行う。しかし、介助者の体型及び援助方法により、腰痛その他の障害が起こる可能性もあるため少しでもこれらを防ぐために、移動式足踏台を作成し検討してみたので報告する。